

無個性でアーマー纏ってヒーローしてもいいですか？

サイリウム（夕宙リウム）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

答えは聞いてない。

無個性の転生者（女）がヒロアカ世界でアイアンマンになろうとするお話。

# 目次

こんにちは個性社会	1
めげせ社長	16
わたしばらじうむだいですき	24
ぶつ壊れました、PCが。	32
普通自分の母の声入れます？	38
武器作るのたのちい	44
ぶつつけ本番で成功させた社長はすごい	54
姉貴は苦労人	63
マイ人工衛星ってカッコよくないですか	72
起動実験の日	77

磯野、試験開始の合図をしろ！	84
……	99
初日の様子は次回他視点でやるなんて	



# こんには個性社会

まあ、とりあえず。現状を把握しよう。

何か行動を起こすのはそれからだ。

まあ早速になるがカミングアウト。私、転生者です。

正直このご時世。アニメやら小説やらで皆様過食気味であろう単語だが、今の私を表現できる単語がそれしか思い至らなかつたのでご容赦していただきたい。

ちなみに前世の記憶は前世の個人情報をきれいさっぱり抜かれた状態。所謂神様転生をしたのだろうか？ 神を名乗る存在に会わなかつたため詳細は解らないが……、と  
うか今、この時点で記憶を取り戻したのでしつかりとした判別がつかないのが問題である。まあとりあえず前世の私の名前だとか、家族構成だとかはさっぱり覚えていない。記憶として残っているのは趣味としていたであろう漫画、アニメ、映画などの情報や前世の私が生きてであろう時代の記憶などの前世の私に関連しない記憶ばかり。その時代を生きたであろう記憶が20年以上あるため、前世の私は成人はしていたのであろうが……、まあ今の私に必要なそうなのは趣味の方の記憶にあるため不満はないのだ

が。

それで、皆さまが今一番気になっているであろう、この私が転生した世界。

喜びたまえ、『ヒロアカ』だ。

れつきとした個性社会である。過去に光るゲーミング赤ちゃんが生まれて以後、人々に超常的能力、“個性”が発現しヒーローとヴィランという社会構造が現実化してしまった社会。一般人に厳しすぎる社会ともいう。

それでまあ、今の私が置かれた状況というと……

「その……、大変言いにくいことなのですが……」

「娘さんは無個性だと思われます。」

改めて自己紹介させていただく。

重威イスズ、漢字では五十鈴。性別は女で、齢は五つ。

ほとんど個性によつて社会的カーストが決定するこの世界において、人生に一度だけの個性ガチャという人生をベットするガチャに、ハズレである無個性20%の方に振り分けられてしまった幼女だ。

つまり敗北者である。

—————

まあ、なんだ。つい病院の中で「乗るなハイエース！」なんて叫びそうになった今日この頃であるが、私は冷静ではある、多分。

あ、ちなみに個性の有り無しを判別したのは例のAFO関係者のハゲ医者ではなく普

通の医者、近所で個性判別をしてくれる医者（個性・個性判別）として有名な方だった。

私の個性の発現が周りの子に対して遅かったため両親と共にこの医者の世話になつたわけだが、まあ結果は結果である。私含めて（内心は記憶が戻ったことに対する動揺）お通夜みたいな雰囲気であり、おそろくだが「無個性」というこの世界においてとんでもないショックが私の眠っていた記憶を呼び覚ましたのだろう。

私のショックが大きかったこと、また両親や判別してくださった医者の雰囲気が終わっていることは、この個性社会においてはまあ仕方ないことなのかもしれない。前世の私のオタク趣味が高じてか、この『ヒロアカ』世界についてはコミックである程度予習済みであるため理解できるが、無個性とは社会的弱者、である。前世で問題視されていた差別問題よりもひどいかもかもしれない。

原作であつた主人公緑谷に対するストーリー序盤にあつたいじめや、昨今公開された劇場版を見ていただければ何となく理解していただけたと思う。大人は対処せず、無個性をいじめ、また無個性は自身がそうであることを隠し、その行き過ぎた社会による排除は一部であるが犯罪者に繋がってしまう。それがすべてではないだろうが実際として例が上がってしまったている。

まあ簡単に言ってしまうえばお先真つ暗なわけだ。しかも……



父：重威 工事

個性：機械化

職業：ヒーロー

母：重威 あかり

個性：光線

職業：元ヒーロー（現在専業主婦）

というヒーロー一家に生まれた落ちこぼれ。まだよかったのは兄弟姉妹などの問題を考えずにすむ一人っ子であったことだろうか……。

「そう……ですか。……いや大丈夫だイスズ！ 無個性だったとしても世界には色々な選択肢がある！ 大丈夫だイスズ！ 父さんが付いているとも！」

父が私を何とかして元気づける声をかけ、母がやさしく抱きしめてくれる。この時点でちょうどそちらに向かって語り掛け始めた冒頭に時間が戻ってくる。ヒロアカ二次

作品によくある「豹変する親」とかではなく、愛情をもって面倒をみてくれる親で心底よかった。

でもまあ、残念ながら私は自身が「無個性」である事よりも「転生者」であることの方に思考が割かれており、現在脳内で処理しているのはそちらである。全部が全部「無個性」であることに呆然としてしまっているわけではないため、罪悪感があります。かといつてもこのタイミングで「前世の記憶が戻りました！」などと言うのは違うだろうし……。

でも、「無個性」か。

正直前世の記憶が戻った以上。個性社会で個性を使ったヒーローになれないことは少し口惜しいことではある。その上これから私が置かれる社会的弱者の椅子に対して思わないことが無い、と言ったら嘘になる。立ち回り次第で色々変わってくるのだろうか如何せん今の親に迷惑をかけてしまうのは必然であるし、いじめなどの被害に逢うのは単純に嫌だ。

……仕方あるまい。『転生者』というよりも5歳の上でこれまでの思考ができて  
いる異常性を使う。

診察室でありながらこれまでの家族の時間を邪魔せず、先ほど私たちに告げた言葉の  
選択から目の前にいる医師の性格がかなりの善よりであることが伺える。今後の私の  
人生のためにも利用させてもらおう。

「せんせい、ちのうしすうてすとを、こちらでうけることはかのうですか？」

私がある場で思いつけた、唯一の抜け道が、これだった。

—————

結果として、私の賭けは成功した。

子供の体に成人した人間の思考能力、所謂名探偵コナン状態。所謂その異常性が超常  
的であると判断され、医師の「個性：個性判別」では『無個性』と診断されたが、客観

的に見て何らかの個性を持っているのは明らかであるということから私の個性は「個性：思考強化」として登録されることになった。医師である彼は私が無個性であることを解つてはいたが、無個性で生きることの難しさ、また両親がプロヒーローであることも考えて私を個性アリとしてくださった。本当に感謝である。

「本来ならこういった個性は成長と共に本人が扱い方を理解していくので、それに合わせて届け出の変更などをしていくのですが……」なんて言っているのだ。解つてて言うてくださっている。

と、いうわけでほとんどイカサマで「個性：思考強化」として正式に届け出を提出した。

あれからというものの、無個性診断以来、両親は私が『本当は無個性である』ということを理解しているため非常にやさしく、『何か欲しい物はないか?』『何かしてほしくないことはないか?』などと話しかけて思いつきり甘やかしに来ているのが少々気恥ずかしいところではあるが、両親の性格が今のように善でなかつた場合『くく家の面汚し!』つてな風に処分されていた可能性も無きにしても非ずなので我慢である。というか感謝で

ある。

それで齢五つによるほんとは無個性ライフが始まったわけであるが……、やっぱり「ヒロアカ」の世界でわざわざ生きるのであれば、やっぱりヒーローになってみたいと思うのはオタクの性であるし、英雄に入って刺激的なスクールライフを送ってみたいと思うのは否定されることではないだろう。しかもヒーローになることが出来れば、この社会における一番いい職であるし、将来は安泰。ならなるしかないヨネ！ まあ原作で起きた事件群のことを考えないようにする、という前提があるが。

幸い父母共にヒーロー、環境は整っている。

やれるところまでやってみようと思う。無個性（届け出上は個性アリ）ヒーローつてやつを。

それで、私が目指すべきヒーロー像であるが……、

無個性で個性面で期待できないのならやっぱり“アレ”であろう。

前世の私が好きだったのか何度も見た記憶、異様なほど鮮明に残るあの映画作品。彼自体には周りに比べて特殊な能力はなかった。

だが、彼は最後まで戦い抜いた。

彼の武器はその頭脳と精神性。

名を、トニー・スターク。

ヒーローとしての名は、アイアンマン。

私が目指すものは、これだ。

—————

【母、重威 あかりの視点】

私たちの娘は、とても賢い子だった。

私子が煩惱なせいでそう思っているだけかもしれないけど、周りに比べて、突出して賢い子だった。

言葉を覚えるのも早かった気がするし、私たちが彼女に求めていたものをずっと前から把握していた気がする。トイレだとかご飯だとかそういういたものをすぐに主張してくれた子だったし、幼稚園の先生からもすぐく大人びている子供だと言われてたから、やっぱり賢いのだと思う。あとやっぱりかわいい。

夫は個性の影響か、体が機械機械しているけどとてもきれいな白い目。それと私の白髪を受け継いでくれた愛しい我が娘。白眼に白髪、整った容姿。どこに出しても恥ずかしくない愛娘。あ、でもやっぱり他の人に見せるのはちよつとかわいすぎるからダメかも。変な虫が付いちやいそうだし。

そんな愛娘、イスズの個性発現が遅くそのことを調べてもらおうと思い、夫と病院に行つたとき。

イスズが無個性だと診断された。

ヒーローとして生きていたからではない。この社会で生きている限り身に染みて解ってしまうことがある。

この社会は無個性に異様なほど、厳しい。

学生生活を送る中で、いじめられるのはしよつちゆう。しかも教師たちはそれを自分のキャリアを守るために取り上げない。社会に出たとしても、無個性というものは付きまとう。私は一般の就職活動をしなかったが、耳に挟んだだけでも個性、個性、個性。どこでも、その職種が何であつても付きまとう。

そんな個性社会の中で、私たちの子供が無個性。

夫はイスズのために、必死に声を掛けたが私にはただ抱き締めることしかできなかつた。

そんな時、イスズは、親である私たちが聞いたことのないようなはつきりとした声で

「せんせい、ちのうしすうてすとを、こちらでうけることはかのうですか？」



と、言った。

最初、イスズが何を言っているか解らなかつた。

彼女が、まだ5歳の彼女が知能指数なんて言葉を使っているなんて夢にも思わなかつたし、何故そんなことを思いつけたのかも、時間を置いた今ですら解らない。

何故か、イスズの言いたいことが解つたのであろう担当医の方は、すぐにテストに必要なものを用意してくださつた。私は何が起きているかよく解らなかつたが、ただ、イスズの未来が明るくなることを祈るしかなかつた。今思い返せば何故親である私がイスズの思いをくみ取れなかつたのかと悔しいし、夫はその時イスズがしようとしていたのを気が付いていたというからもっと悔しい。イスズへの愛じゃ負けてないんだから。

結果。すべてがイスズの思い通りに進んだらしい。

私はイスズのこと心が心配で頭が一杯だつたので詳しい話はちゃんと聞けてないが、なんでもとんでもなくいい数値をたたき出したらしく、それを個性とすることで公共の機関に届け出をちゃんと出せるということだつた。

その個性が何であつてもあるのとないのではとんでもなく違う。私たちはその話に

飛びついた。

それからというものの、私たちのイスズに対する溺愛はすごいものだったらしい。イスズ本人から指摘されて最近是我慢しているが、今でも出来たらあのプニプニなお顔を触りたいし、抱きしめたい。やりすぎると嫌われるといまだ現役の後輩に言われたので我慢するが。

そんなさなか、昼食後の片づけをしている時、イスズに話しかけられた。

「ははさま、こちらのほんをかっていただきたいのですが……、よろしいでしょうか？」

先月の誕生日で彼女が欲しがったタブレットの購入画面を見せながら上目づかいで私におねだりしてきてくれた！

買います！ 買いますとも！ 私が現役時代に貯め込んだへそくりで全部買っちゃ

う！

その後、届いたたくさんの本。買った当時は絵本か何かと思っていたが、偉い学者さんたちが読みそうな専門書ばかりでとつても驚いた。愛娘が私が思っていた以上に賢いみたいでママ大歓喜！

「つていう話をされてねえ。」

「いや工事さん……、今仕事中ですしご家族自慢は後にしていただけると……。それに愛妻家なところは俺じゃなくてマスコミ相手にやってください。」

「アハハ、すまんすまん！」

## めぎせ社長

どうも。無個性ながらヒーローを目指している重威イスズと申します。どうか、よろしく。

さて、前回目指せアイアンマンという目標を立て、自身に溺愛中の母に上目づかいを行うことで専門書群を買いあさったわけだが……、今のところそこまでうまくいったくない。

前世の記憶、自身につながる記憶が一切ない、つまり前世で学んだ一般常識十オタク知識ぐらいいしか役に立つ記憶がない以上、単に精神性だけが成熟している5歳のガキが急に専門書を読んだとしても、すぐにあのスーツを作ることができますか？ と、問われればNoなわけで。

言語的な問題はないのだが、そういつた知識が根本的に足りないためネットでいろいろと調べながらなんとか読み解いている次第である。なので別に文字の羅列を読んで

いるだけであって、全部理解しているのではないからそこまではやし立てないで頂けるか、母様。

「ううん！ 読めてるだけですごいんですもの！ だって私漢字どころかひらがなでさえ教えてないのよ！ それなのにいつの間にか覚えてるし……、やっぱりうちの子は天才、神童だわ！」

……先ほどから、というか読み始めてからずっとこの感じだ。確かに前世の記憶のおかげでそういった言語的な問題は気にしなくてもいいのだが、前世という飛び切りのズルをしているみたいでなんだか褒められていると申し訳なくなってくる。せめて天狗にならないよう気を付けなければならない。

さて、興奮する母を置いておいて、この「ヒロアカ」世界における現在の科学技術을述べていこう。まず結論であるが、私の目指すアイアンマン、彼の作り上げたそのスーツをヒロアカ世界の現在における技術で作成できると聞かれれば、答えは部分的には可能、というものになる。

部分的に、というのは彼の作成したスーツの外装、装甲部分、およびジャーヴィスな

どのAI、頭部装甲に映し出されるディスプレイなどの機能は現在進行している科学技術、もしくはこの数年のうちに試作品が完成できるかもしれないというレベルであり、おそらくそれを流用することで実現が可能である。これによりかなり甘めの試算であるが、私が雄英を受験する10年後までにはAIアンマン作中にあったマーク2のナンバリングをもつスーツの複製は今挙げた部分のみ私の手で可能であると考えられる。

そして、部分的に不可能な部分。それは動力源だ。まあ作中でもオーバーテクノロジーの産物であったため致し方ないのかもしれないが、作中におけるアークリアクターに類似、もしくは代用できそうな動力源の存在、もしくはその源流といえるようなものが全く持って存在していない。

これはとつてもマズい。この私が住む世界において科学技術の発展が人々の個性に基づくものであったせい、か、動力源、内燃機関などの小型化の技術がマジでない。確かに強力な個性があれば、それを動力源にすることで補えるのだろうか……、マジで開発されてないし、研究すら発見できなかつた。

おそらくだが人類の個性発現のせいで宇宙開発が遅れたのと同じようにこういった小型で、発電所並みの電力供給を可能とする機器の開発が後回しになった、もしくは必要なくなったのだろう。

個性黎明期において、異常存在である個性に対抗するため何かそういったものが開発されてもよいものであるのだが……、あつたとしても今の社会によつて闇に葬られたと考えた方がいいのかしれない。

……致し方ないが、あのアイアンスーツを再現するのにアークリアクター、もしくはそれに準ずる動力源の開発は急務。正直ヒーローになる、という目標がアイアンスーツを作り上げるになつてきているがまあいいだろう。あれカッコいいから自分で作りた

い。  
前世は技術畑の人間だったのか、それとも私の好みがそちら側なのかは解らないが、新しいものを作るとなると心が浮足立ってくる。学はないが、夢はある。なあに時間は10年あるのだ。作中でトニーはテロ組織に捕まっていた中で、ろくな設備がないような洞窟でマーク1を作成したのだ。悠々と親の庇護下でのんびりしている私にできないはずないだろう。

よし、とりあえずは私の研究を手伝ってくれるトニーのジャーヴィス的存在を私も作ろう。優れたAIに成長させるためにはかなりの時間を要するし、早い方がいい。それ

に想定通り、作中のような能力を持ったAIが出来ればリアクターの研究もやりやすくなるだろう。

私はその筋の専門書から読み進めることにした。

「そういうえば、いまのたぶれつとだけではきのうがたりないかもしれないな。ぱそこんをかかってもらえないかきいてみるとしよう。こうせいのようなものがないな。」

—————

【父、重威 工事の視点】

「ミスター・マシン、助けてくれてありがとう！」

「ああ、いつでも呼んでくれよ！ 気を付けて帰るように！」

都市部とは違い、住宅街。それもベットタウンとなるとやはりヴィラン関連の事件は少なくなってくるな、などと呑気なことを考えながら先ほど助けた男の子を見送る。



ほとんど日課に近いパトロールを行っていた時、高い木から降りられなくなっていた子供がいたので救助した。こういった小さい事件では私たちの給料は上がらないが、心は豊かになる。

「家族のため、娘のためを思つて拠点を移したが案外こつちの方がいいのかもしれないな。」

同じ学校を卒業した妻とチームを組み、都市部で活躍していた私たちは子供が出来たことを区切りに今の地方、住宅街が多くある付近に自宅とヒーロー事務所を移した。

ヒーローとヒーローの結婚は探せば結構あることだが、その子供が人質になったり、そのヒーローに恨みを持つヴィランに狙われるというのは非常によく聞く。サイドキック時代の友人がその被害を受けてしまったということ聞いた私は、妻と娘を連れてこの街にやってきた。

私の個性を見込まれてか、都市部での犯罪でお声がかかることもあるが、基本はこの街のパトロールをする。自分の家族も住むこの街を守ることは、家族を直接守っているような安心感も得ることができし、人の多い住宅街でパトロールに精を出すのは犯罪の抑制になり、評判もいい。

「それにしても、さつきの子はイスズぐらいの年齢だろうか？」

そんなことを口ずさみながら、胸のポケットにある家族写真を取り出す。  
愛すべき妻と娘、それと私が映っている写真。

娘のイスズは、無個性と診断されてから非常に精神的に動き始めたと思う。あの時の衝撃、そして彼女の機転、その考えに至れるほどのこの社会に対する理解。とても5歳児とは思えない。なんだかそういった個性なのではないかと思ってしまうぐらいだ。

別に、それがどうかしたというわけではない。私としては変わらず彼女のすべてを愛し、応援するつもりであるし、妻も溺愛しすぎている気がするが同じだろう。

先日、無個性であることが判明し、彼女の機転と担当してくださった医師の御好意により「個性・思考強化」として届け出を出した後、私は彼女にあることを聞いてみた。イスズなら私たちよりも冷静に物事を考えているだろうと確信して。

「イスズ、今の君の夢は何だい？ この前までは私たちがみたいヒーローになりたいと

言っていたが、今はどう考えているのか、私たちに教えて欲しい。」

「……いぜん、ひーろーです。そうこえたかだかにせんげんでできればよかったです。うまくいかないものですね。ですがあたらしいもくひょうはあります。あるていどかたちになるまでは……、まっついてほしいのですが、いいでしょうか？」

「……そっか。うんいいとも！ 私たちはいつまでも待つよ。でもなにか手伝えることがあったらいつでも言つて大丈夫だからね！ ……あとそんなにかしこまった話し方しなくてもいいんだよ？」

「しょうぶんですので。」

まあ、ちよつと硬いのは五歳で娘の甘える姿が見られなくなっていて残念だが彼女はすでに乗り越えている。新しい目標が出来ているようで何よりだ。

「うん、私も負けなないように頑張らないとね！」

## わたしばらじうむだいすき

やあ、どうも。

最近食事中に書籍類を読むことを幼稚園の先生に注意されたイスズだ。まあ確かに行儀は悪かった、謝罪する。

今日は私のAI開発の進捗について発表させていただく。開発を始めてから半月ほど、一応情報を集積し、学習していくタイプのAIであるが、完成はした。と、いつてもAIアンマン作中で出てきた自分で思考し、発言するようなものではなく、単に情報を集めるだけのAIになる。

私の生活や、ネットの情報、世界情勢などの膨大な情報を食わせながらどのようにこのAIが成長していくかを調べる予定だ。ここで得られた成長データをもとに思考するAIを作成していかうと思う。一応プロテクトなどで行動を制限しているので暴走する可能性はないはずだ。まあ暴走しても、それが一つのデータになるのでおいしいのだが。

そんなわけでAI研究がひと段落し、AIが学習している間にアークリアクター、その原型である原子力についての本を読んでいたところ、幼稚園の先生にお叱りを受けたというわけだ。

精神年齢は成人しているため、思うところがないと言えば嘘になる。

まあ両親も誰かと交友関係を持ち、簡単な社会を学んでほしいということを入れてくれたのだ。わざわざ先生方を困らせる趣味もないし、決められたものだけしつかりと行っていけば私がどんな本を読んでいたとしても咎められることはない。

幼稚園の方にも私の個性が「思考強化」であることが伝えられているので、まあ小難しい本でも読んでいるのだな、というだけで怪しがられることもない。それにカバーもしているしな。

と、まあそんなわけで私は読書しているのだが……

「ねえ、いすずちゃん。なによんでるの？」

と、まあこのように誰かが話しかけてくることもある。

「……くるまとかがうごくしくみってあるでしょう？ あれのもっとおおきいのについて。」

「ケロ、やっぱりいすずちゃんってかしこいのね。」

と、まあ皆さまお気づきの通り、彼女は梅雨ちゃん。蛙吹梅雨であり、原作に登場するA組の一員である。自動的に現在私たちが愛知県在住であることが確かになるが……、まあ別そのことは別にどうでもいいだろう。

「それで、つゆちゃんもよむかい？ いまならゆうしゅうなせんせいやくもついてくるよ。」

「ううん、このまえすごくねむくなっちゃったから、いいの。」

人が説明しているときに寝てしまったら悪いから辞退するということだろう。ま、確かに今読んでいる私もややこしくて頭をひねっている。解らない奴が解らない奴に教

えても何の意味もないし、致し方なし。

ちなみにこの時点で私が梅雨ちゃんと同じ年であることから私が原作における主人公たちと同世代であり、私が高校一年に上がる頃に今活躍しているオールマイトが倒れ、AFOが暗躍し、解放軍閥連が色々置き、などの様々な騒乱が起きると確定したわけだがどうしようもないだろう。転生者である限り何らかの形で原作と生きる時代が重なると思っていたのだから問題はない。

私はそれまでに準備を整えておく必要がある、ただそれだけだ。

……だが、入学時に作中のマーク2程度では足手まとい、最悪命を落としてしまう可能性もないとは言いい切れない。入学後に脳無の襲撃もあることだし、これは研究速度をもっと上げる必要があるかもしれないな。

とりあえずは目の前の書籍を読み解くことから始めよう。

そういえばパラジウムなんてどこで手に入れるんだ？

現在幼稚園終わりの帰宅中。イスズは母親からスマホを借り、調べものをしてるようです。

パラジウム。アイアンマン作中でアークリアクター、その初期型の原動力になった鉱石。あんなやべえものできるぐらいだからさぞかしウランとかの危険物質と同じように取り扱われていると思っっていたが……

「あ、ふつうにいききんぞくとしてかえるのね。」

そう、普通に買えたのである。まあ一グラム8000円弱ぐらいのかなりお高めであるが。

作中で最初のアークリアクターを製作した時、使用していたパラジウムのリングはそこまで大きく、またグラム数も大きそうに見えなかった。高くつくがリアクター作成のために購入することは不可能ではなさそうである。



「だけどようじにはてがでない、そしてしっぱいしたときのことかんがえてなかった。」

そうなのだ。書いてる側も忘れがちになるぐらいだが、こいつまだ幼稚園児。一般的な彼らにとつてリーサルウェポンになりうる駄菓子ですら10円単位、簡単なおもちゃ付きでも100円単位。リアクター作成のために失敗した時のことも考えるとかなりのグラム数が必要になってくる……、つまり親の許可が必要なのである。……まあこいつの母親なら脳死で出してくれる気がするけども。

あとは失敗した時の被害のこともコイツは忘れていたようである。現在イズズが目標としているマーク2，マーク3が登場した「アイアンマン」の中で登場した敵役、アイアン・モンガー、あのいけ好かないハゲが乗っていたデカイのであるが、その最後は展示用巨大アークリアクターの中に飛び込んで大爆発である。イズズが同じように実験で失敗し、あたりもろとも蒸発する可能性はないと言い切れない。

「さすがになにもなせぬままきえるのはごめんこうむる。……シミュレーションとかできるようにプログラミングとかべんきようしたほうがいいのか？」

……もしやぶつつけ本番でやるつもりだったんかおめえ!? 周りの被害を気にして

いない、これが転生者。馬力が違いますね。あ、あとパラジウムだけだといつか頭打ちになるけど原作で登場していたヴィブラニウムはこの世界に存在していない、って調べたから知ってるよね？ そこら辺どうするの？

「まだはっけんされていない、のまちがいだろう。さいあくいちからつくるのでもんだいはない。」

「あれ、イスズ？ どうしたの？ さつきからスマホ覗き込んでぶつぶつ言ってるけど何かあった？」

「あ、いえははさま。だいじょうぶです。あとしらべおわたのですまほおかえししますね。」

「うん、ありがとう。……パラジウム？」

「はい、ひつようになるかもしれないかもしれませんのでにいれられるかしらべていました。……あ、すぐにはいらないのでかってもらわなくてもだいじょうぶです！」

「あら、そうなの？」

イスズの母、すでに100g購入しようとしていた。いや娘のためにどれだけ散財するおつもりなのか。

ぶっ壊れました、PCが。

「えっと、ここの緑の奴をはがせばいいの？」

「はい、ねじでとめてありますのでそれからはずしてください。あついでちゅういを。」

「……ホントね。ちよつと待っててスーツの腕甲取ってくるから。確か耐熱機能付いてたしあれなら大丈夫よね！」

はい。反省中です。

まあいくら高性能なものを買ってもらったかといつて家庭用のPCにただ情報を収集するしか能のないAI（成長する予定だった）をぶち込んでそのまま放置していると……

際限なく情報を集めようとしてP Cの負荷限界以上の動きをしようとするのは明白なわけでした。

今朝の幼稚園に行く前にA iとP Cを起動しそのまま向かったのが仇になり、帰ってきた時には何かが焼き切れたにおいとP C本体の方からなんだかヤバめの煙が出ていた。

運悪くちょうど母が外出（父の事務所の方を手伝っていたらしい。免許の方は返納していないらしくヒーローとしてまだ活動が可能だと聞いた。）しており、母の帰宅と私の帰宅が重なっていたため発見が遅くなってしまったのである。

被害はP C本体の異様な放熱となんか煙出てた、というぐらいで収まったのでよかったのだが、このまま放置して家が火事になっていたらと考えるとマジで申し訳ない。

現在タブレット片手に色々と調べながら生きている回路を捜索中である、ただ5歳児になんか煙出てるのを触らせられるか、ということとで指示私、実行母の体勢で現在P Cを解体中だ。……まあ機械工学の方も学ばねばならなかったのよかったですのか？

ちなみにこの失敗については

「昔、ママもサポート課の子に作ってもらったアイテムすぐに壊しちゃったことあるし、しようがないし、しようがない！」

とほとんどおとがめなし。……本当に申し訳ない。

とまあ母が手袋代わりにスーツの腕甲を持つてきている間に、今回の失敗を生かせる方法を考えていこう。

まずA Iの作成に関してだが、学習させようとした情報量が多すぎた。これまでは単にネットをつなげて「後はこれ全部学んでおいて。」という形だったが今回の家庭用PCでは不可能であったことが解った。まあ当たり前なのだが。これの対策としてPC側のスペックを上げよう！、はさすがに金銭的に莫大なものが必要になってしまいうしろし、やはり食べさせる情報を少なくしよう。

食べさせる情報としては……、二種類。まずは私に関しての情報。目指すA Iはアイアンマン作中のジャーヴィスであるためこちらについてよく知っている必要がある、あ

と人間に対する知見も。もう一つは株関係の情報。今回の一件で、というか前回考えていたパラジウムとかの入手のためにはやっぱりお金が必要になる。今後私が考えた技術を売る、特許で稼ぐなんかもできるようなにはなるだろうが初期費用が今ない。さすがに親に負担を掛け過ぎるのは申し訳ないし、自分で稼げそうなのはこれぐらいだろうか？

まあこの二種類ぐらいなら何とかできると思う。  
持ってくれよ！ PCのスペック！、というわけだ。

—————

「えつと、これは……？」

「イスズちゃんがバラバラにしたパソコン。」

「ええ……。」

今日も疲れた後に帰宅。愛する妻と娘が待っている我が家で待っていたのは先日買ってあげたパソコンの哀れな残骸だった。

「私説明してもらっても全くわからなかつただけど、えーあい？ ってのがパソコンを重くし過ぎて壊れちゃったんだって！ ……パソコンが重くなるってどうゆうこと？」

「ええ……？」

いやうちの子賢いし、一般的な幼稚園児に比べたら格段なのは知ってたけどAIって何？ なんで作れたの？ 妻は全くそういったこと解らないし、イスズも嘘をつくような子じゃないからたぶん本当なんだろうけど……、ええ？

「だからまた新しいの買ってあげようと思うんだけどイスズちゃんが欲しがってたの結構高くて……、買ってあげてくれない？」

「ええ……？」



なお、イスズの父である彼のお小遣いは当分0になったことをここに書き記しておく。

イスズは新しいの買ってもらって（結構いい物）喜んでいたが、「あれ？ 買ってもらったのはいいけどこの金どこから？」と思つたがその疑問を解決するよりも自分の研究を進めることの方に興味が勝つた。

つまりきれいさっぱり忘れたのである。

## 普通自分の母の声入れます？

さて、皆さまお久しぶり。前回から二年ほど経ち現在私も小学生になりました。春とともに一つ成長するというものはいいものですね。

どうも、重威イスズだ。

まあなんで前回から時間がかなり離れているかというところ……、まあ何もなかったからである。いやちゃんと私自身の成長はあったし、AIの成長も軌道に乗っている。ただ見栄えが悪いというか、見どころがないというか……。まあ単なる日常だったわけだ。

ちなみにだが私は近所の公立小学校に進学した。幼稚園で一緒になった梅雨ちゃんも一緒であり、運よくクラスも一緒であったため仲良くしてもらってる。まあ基本的に

私はずっと本を読んでいるのでこちらから話しかけることはそこまでないのだが。

ではでは本題に移っていいこう。これまで見どころがなかったため飛ばしていたということは、今回は見どころらしきものがあるということ。

そう、新しいAI君の目覚めの時間である。

現在開発、育成中のAIは二つあり、一つ目は私の生活や行動を情報として食わせ、人との会話を目標に育成していたもの。もう一つは株で稼がせようとその筋の情報を食わせていたものである。

最初はこの二つを一つのAIとして作成しようとしていたのだが重くなりすぎたのでやめた。新しく買ってもらったPCに株のAIを、元々持っていたタブレットの方に会話できるAIをぶち込み、育成することになっている。

まあ実は株の方はすでに稼働しており、少ないながらも利益を上げている。世界情勢とも連動する株であるため大きな負荷に耐えられるPCの方で育成していたのだが、うまくハマったようでよしとする。このまま稼いでくれたまえ。

んでもう一つの会話するAIの方だが、今日を持って情報を収集するだけのAIから、自分で話しかけて情報を自ら集めにいくAIに進化させる。プログラムはできてい

るはずだし、二年間の情報も十分食わせたはず、そろそろ他のことに手を付けたいのでそろそろ一人歩きしてもらおうというわけだ。

ちなみに発声もできるように、母の音声データを取らせてもらった。理由としては前世に存在してボイスロイドの声と母の声が非常に似かよっていたのでつい、おねがいしてしまった。身近にあかりちゃんがいるんやぞ、致し方ないであろう、同志。

……まあ母の名もあかりであるため、面と向かって母様に「あかりちゃん！」なんて言えるわけもないが。

と、いうわけで母の声でしゃべるAIが出来上がってしまったわけである。ちょっと闇が深い気がする致し方なし。

ちなみに梅雨ちゃんに頼もうかと思ったがなんだかそれもそれでやばい気がしたので、採用は見送った。音声データはとったが。

では、小話もそこそこに、早速AI君を起動していくとしよう。

名前はそのまま原作のジャーヴィスをとつてもいいが、そこまで模倣するのも悪い気がする。……初めての会話型成長AI、ということではイヴとでも名付けようか。まあそうすると株の方のAIがアダムになってしまいがそつちはそつちで考えている名前がある。

さあ、『イヴ』目覚めの時間だ。

〈プログラム作動〉

『……おはようございます、マスター。会話型自立思考AI、イブ。起動しました。』

「Hello World ってとこかな？ これからよろしくね、イヴ。」

『それで、マスター。私は何をすればよいのでしょうか？』

「えー、とね。まあ初めは情報収集。自分で学ぶ、って言うのをやってみて。こっちのP Cに私の研究資料とかあるからそれを読み込んで欲しいし、私のサポートも今後してほしいから技術面と戦闘面がちょうど半々になるように学習、ってことで。後、今の世界情勢とかも軽く見といて。」

『解りました。』

「あとタブレットのスペック限界を超えないようにしといてよく、さすがに壊れるのは勘弁。私は兵器開発の方進めてるからなんかあつたら呼びかけてよね。」

『かしこまりました。』

んじや、早速開発の方やっていきますか！

リアクターはパラジウムが一定量手に入らないかぎり実物の実験できそうにないし、今の興味は兵装の研究の方に行っている。

うん、やっぱり私技術の人間だわ。クソ楽しい。

—————

「えっと。これを読み上げればいいの？」

「うむ！ たのんだ梅雨ちゃん！」

「えっと『けーこくします！……』」

## 武器作るのたのちい

「それで、完成したから見てほしいというのは……。」

場所は事務所の地下トレーニング場。私の機械化、体を機械化することで増強型のよ  
うに身体能力を上げる異形型の個性の性質上必要になった場所なんだが。

「はい。見た目が見た目ですし、威力もどこでセーブしたらいいのかわからないので。  
実験できそうなのが父様の事務所ぐらいしか思いつかず……。」

「うん。いやそれは別にいいんだよ？ ケド正直ヒーローとしても父としても何作つて  
るの!?!、というの言わせてほしい。うん。」

自作したサポートアイテムを使ってみたいから、ということと事務所の下まで来ても  
らったわけだけど……、かなり仰々しい入れ物から出てきたのは二丁の銃器のようなも



の。先端が細くなっているようなものでなく、全体的に直方体のタイプ。

「いや、正直お父さんなんて顔したらいいのかホントに解らなかつたからね!? いや急にそんなもの小学一年生が持ち出すものじゃないからね!？」

「ごめんなさい。ですがさすがに人目のある野外で実験するのは駄目だと思ひまして。」

「確かにそうだし、ちゃんとわかつてるのはいいことなんだけど……、ちなみに母さんはなんて言ってたの?」

「とてもいい笑顔で『うわあ! こんなもの作れるなんてやっぱりイスズちゃんは賢い! すごい!』だそうです。絶賛してくれました。」

「確かに作れること自体ホントにすごいんだけど……、説明してもらってもいい?」

「モチロンです。」

—————

あれから少し過ぎ、世間は夏休みとなりました。

気温は暑く、過ごしづらくなってきましたが、父は肝が冷えたようです。でも、イスズです。

今日は父様の地下トレーニング場で試作した兵器の試射会をしております。ヒーローの子供と言ってもお外で銃器乱射したら捕まるし、迷惑かけるのでわざわざこちらのほうお借りしてやっています。ちなみにこの銃器のもとなったのはモデルガンやスタンガンなどの護身武器ですが性能はモノホンに劣らないイスズちゃん印なのでピカイチです。

では紹介していきましょう。

一つ目はエネルギーガン。大目標のアイアンスーツ、そのメイン攻撃になるだろうリパルサー・ビーム、ユニ・ビームなどのリアクターのエネルギーを放出して攻撃する。そ

れを実現するために作成した発射機能の試作品になります。

元がモデルガンなので連射性や冷却時間の長さが問題ですが、結構いい線行っているかと思っています。

「……思ったよりすごいの出てきたなあ。」

「現状、大きなエネルギーを生成する、分けて貯めるといいうのが難しく、弾丸は一発ずつリロードするタイプで、その弾丸、エネルギーパックも一度使用すると6時間ほどの充電が必要になります。」

二つ目は特殊弾を発射する銃。銃器自体に特殊なところはありませんが特筆すべきはその銃弾。今回用意したのは三種類、スタンブレット、スパイダーブレット、ホークブレットです。

「スタンはそのまま。当たった対象に高圧電流を流して気絶させる。スパイダーは対象者に弾丸が当たると瞬間に弾丸に仕込まれている網が起動、対象者を捕縛します。一番の自信作であるホークは銃のほうでターゲットイングした対象をホーミングする機能が

あります。小型化が難しく、どれも3cmほどの弾丸になってしまったのが欠点ですね。今後はこれの小型化と一つの弾丸にすべての機能が追加できるようにするつもりです。」

「……これ市場に出回るとホントにヒーローの仕事なくなりそうなんだけど。」

「自分で使うだけなので公にはしませんよ。データはできる限り厳重に守ってますし、弾丸も今回試射用に用意したのだけです。」

「家に入り込んで手に入れようとしてもプロヒーローの母さんがいるから大丈夫ということか。」

「そういうことになりますね。」

「うん、知らないうちにすぐく置いてかれた気分だよ、いや喜ばしいことなんだけどね。……このサポートアイテムを使ってヒーローを目指すのかい？」

「はい、と言つてもこれはまだ試作品。私が作りたいたもの的一部分にすらなりません。ですのでもだまだ、ですな。」

そう、まだまだ。肝心のアークリアクターの作成はパラジウムなしで設計だけしようとしているが失敗続き、大型のリアクターの作成だつてシミュレーションで失敗している。私の動きに合わせて動くアーマーの作成だつてまだだし、積み込む武装は全然できてない。

「まあこのまだまだ、つてのが楽しいんですけどね。」

—————

「さて、わが友梅雨ちゃんよ。用意はできているか？」

「ケロ、急に呼び出されてんだから何を用意すればいいかわからないわ。」

「うむうむ、それは大丈夫だとも、身一つあれば何もいらないのでな。あ、それと金のことは気にするな。わが母様より資金援助の方を受けておるゆえ（ほんとは勝手に株で稼いだ金）。」

「ならこんどお礼言わなくちゃ。……あと今日はすぐウキウキしてるのね。それと喋り方も変。」

「……失礼、少々はしやぎ過ぎた。まあなんで今日呼んだかというと梅雨ちゃんのお母さん、臨月……、赤ちゃん生むので大変なんでしょう？　梅雨ちゃん家で一人つて聞いたから気分転換に遊びに行こうかな、と思いました。」

「……ありがとう。」

「まあ行先は私の趣味なんですか。」

と、言うことでやってきました近所のジャンク屋！ 何でも取り扱ってるお店だぞ！  
店主は女性でイスズちゃんと仲がいい姉御肌だ！ ちなみにだいぶ前に破壊したP  
Cの生きている基盤はここで売却したみたいだぞ！

「やほ〜、姉貴おる〜?」

少し暗い店内から赤髪の女性が手をふきながら出てくる。

「あ〜〜!? また来たのかよクソガキ。もうエアガンとスタンガンはあれで全部だよ！  
欲しかったらもつとちゃんとしたおもちゃ屋行きな！」

「今日は別件だあ〜い！ 中はいるね〜！」

「あ、ちよ、おま！ 気を付けるんだよ！」

「お邪魔しますケロ。」

「ん？ ああ、梅雨も来てたのか。お前さんも災難だねえ。」

「ううん、大丈夫。おうちにいても一人だから連れて来てもらったの。」

「そうかい、まあ外熱いだろうし中入りな。飲み物はカルピスでいいかい？ どうせあいつ持ちだろ。」

「姉貴〜！ このパソコンばらしていい〜？」

「あホンダラ！ 売り物に手出すんじゃねえ！ やるなら金払いな！ ……つたくも  
う。もう少しは親の前の時ぐらいにお淑やかにしろってんだ。」



「ホイ、これオカネ。あとそいつは無理な相談だぜえ、姉貴。尊敬度MAXな親の前でこんな醜態見せれるわけないもんね！　あと単純にハズイ！」

「あの溺愛夫婦は普通に受け入れそうだがねえ？　あとお待ちどうさま、カルピスここに置いてくよ。」

「ケロ、ありがとう。あと私もそう思う、もう少し素直になつてもいいんじゃない？」

「Oh、四面楚歌じゃん。」

# ぶつつけ本番で成功させた社長はすごい

「イスズの、三分クッキング！」

## 本日の料理

『トニースターク謹製！ 洞窟でテロ組織に捕まりながらもできる！ お手軽アークリアクター！』

### 手順

1. パラジウムを溶かし、鋳型でリングにする
2. 永久磁石を付け、コイルを巻き、はんだ付けで溶接する（この永久磁石とコイルはトロイダジバコイルの役をする）
3. 制御用AIと熱電変換材料（ゲルマニウム、シリコン、鉛、テルル、ビスマス）の入った容器に入れる
4. 水素ガスを入れ、その後電圧を掛ける
5. 完成！ 熱プラズマ反応炉！ 三億Jのオーバーテクノロジーだよ！

「失敗して爆発でもしたらあたり一面キレイな更地になるんですけども。」

あ、どうも。今日も一日元気に兵器開発！ イスズです。

……改めて文字起こすと単なるヴァイランだなこれ。

「まあ今はシミュレーションのためのプログラム書いてるんですよ。イヴちゃん！ そつちまともに動いてますか？」

『はい、マスター。頂いたタスクは現在進行中です。完了まであと3分ほどお待ちください。』

と、いう風に先日起動したAI、イヴちゃんに今計算させているところでござえます。まだ簡単なものしか任せられないけど、いい成長具合で母さん安心いたしました！

……実の母親の声なんですけどね。

ちなみに混乱を避けるため、イヴは私以外の人がいるとき、特に母親が近くにいる場合は声を出さないように指示をしている。理由は単純に他人が混乱するのと私が恥ずかしいからである。

イヴの発声の方は少し機械的ではあるが、母様とそっくりなため家族以外では間違いやすい（先日梅雨ちゃんを招いた時にお披露目をした。最初は母親の声を録音したものだと思っていたらしいので結構似ている）、そして多分だが母様は私が母の声を使ったAIを使っていると知るとたぶん『あらあらあらあら』みたいな言いながら抱き締めてくる。単純にハズイ。

『過去のデータから見てもそこまで大変なことにならないとは思いますが？』

「私がハズイのでダメです。あと普通に思考読むな。」

『予測です。私の基礎になったデータ、そしてプログラムを書いたのはマスターです。』

「だから予測するぐらい簡単、つてかあ？ ……そうだろうけどもなあ……、ちよつと人間味入れ過ぎたか？」

『タスクが完了しました。シミュレーション結果を表示しますか？』

自分の作ったAiと会話する。鏡に向かって会話しているような感じだがイヴ側の作業が完了したようだ。

何をやっていたかという点、最初にレシピを書いていたように、アークリアクターの作成を今現在行った場合どのような結果になるかというものである。

「うむ、表示。」

『まずは初期設定でパラジウムリングの大きさを7cmほどにした場合の結果になります。現在使用している機器を使った場合、最終工程を行った時点で数値が規定値の3倍ほどまで上昇。リアクター自体がエネルギーに耐え切れず爆発する模様です。被害としては現住所の区画すべてが消失します。』

「Oh……」

『なお、15 cmまでリング直径を1 cmずつ伸ばした場合も同じ結果になるようです。また、被害地域は直径の上昇に比例して拡大していく、と算出されました。』

「……マジでぶつつけ本番でやらなくてよかった。」

『慧眼かと。また参考として算出した直径20 mのリアクターは成功エネルギー放出値も安定しました。成功ですね。』

「一応現時点であのつかいは作れる、って言ったところか……。まあ何の成果も得られませんでした！ ってことじゃないしそれは良かったかな。」

—————

「ねえイスズちゃん？」

「お、どしたの盟友。そんな真剣なまなざし。」

学校終わりの放課後。私にとって小学校の授業とかほとんど苦痛でしかないので教科書開いている裏で専門書とか最近出た研究論文とかを読んでいる。まあそのせいで若干孤立気味な私にとってずっと友達な梅雨ちゃんは結構大事な友達だ。

「ケロ、もっとイスズちゃんから話しかければいいと思う。」

「私としては梅雨ちゃんだけいけば問題ないのである。」

「そうなの？」

まああなたの脳内ではあなたの雄英行きはヒーロー科に限定しない場合確定であり、一般科、サポート科も国立の中で最優な高校である雄英に行けるのは梅雨ちゃんや自分を含めた一握り。前世の記憶があるあなたからすれば小学校での交友関係など卒業した瞬間に接点が消えると消滅するのは目に見えている。まあつまり梅雨ちゃん以外と

まともな友達になる気はそこまでないのだ。

「なんだかそんな考え方ダメな気がするけど……」

「んま、私のことはどうでもいいでしょ。んでなんか相談事あるんでしょ？」

「うん。……私、ヒーローになりたいの。それでいつもヒーローに向かって頑張っているイスズちゃんに私が何をすればいいか教えてほしいの。」

「あゝ、なる？」

なるほど梅雨ちゃんがヒーローになりたいと。この感じだと、たぶん梅雨ちゃんのオリジン私確認できなかった感じですねえ、うん。前世でオタクぽかった私からすればちゃんとそのイベントを見れなかったのは悔しいけど、今の私は技術オタク。ちよつともつたないなあって感じはあるけどそこまでだな。

ま、それは今度機会があるときに聞くとして……

「んじやまあ勉強から始めますか！」



「ケロ？」

「体鍛えるだとか、個性使って伸ばすだとかはやるにしても中学生ぐらいから。早めにやりすぎると身体に悪いですし、そもそも私の専門外。ま、それに比べて勉強ぐらいだったら私教えられるしさ！」

「なるほど。」

「それに早めに学校でやる内容終わらせれば空いた時間好きに使えるしね！　じゃあとりあえず今日の復習からやっていきますか。」

「うん。よろしくお願いします。」

（イヴ？）

（どうされましたか、マスター？）

（タスクの中に梅雨ちゃん用の装備を作る、これを足しといて。  
了解いたしました。）

## 姉貴は苦労人

「んでさあ、思うんだけどなんでアタシ名義で株やってんの？　しかもいつの間にかに個人情報抜かれてるし。」

「別にええじゃん、姉貴。納税分と勝手に使用してる分の使用料、しかも手に入れた金は店に落としてるからいいじゃん？　そもそも姉貴株なんてやらんやろ？」

「いや、よくないのだけれども。……はあ、まあ言っても止めないだろうしどうにもならんか。」

「人生諦めが肝心ってやつですな。」

「誰のせいだよ。」

あ、ども。イスズです。

今日は姉貴の店で勝手にホログラムのプログラム書いてます。それと今日は梅雨ちゃん一緒じゃないよ！

「なんだっけ？ このAI。ジャック？」

「そうそう、『ジャックと豆の木』からジャック。株という金を産む鶏の飼育人ちゃんです！ ま、イヴみたいに話とかできない単なる作業用のAI君なんだけどね。」

「わざわざ株なんかで稼がなくてこっちの特許やらなんやら出した方が儲かる気がするんだけどねえ。」

「ま、私がヒーローなるまでお待ち、つてとこだね。それに今の社会にこれだしてもうまく対応できずに色々問題起こるだろうしね。……うし、できた！」

話ながら書いていたプログラムを起動させ、青色の光が空中に映し出される。

「ほへ、何作ってるかと思つたらこんなもんできたのかい。お前さんバカだけど頭の

方はいいんだよねえ、全く不思議なもんだ。」

「ま、技術バカなのは否定しないけどね！　ということであークリアクターのプレゼン、やっていきましよう！」

急遽ここでプログラム組んでたのは姉貴がリアクターに興味を持ってくれたから。まあ急に私がパラジウム用意して、って言ったら欲しがる理由気になるよね。

「ま、簡単に言うとお熱プラズマ反応炉。パラジウム君と水素君が永久的に電力を発電してくれる素晴らしい機械。……まあパラジウムの消耗があるんで半永久ですけどその発電力は驚異の3億J！　火力発電所一つじゃ足りないぐらいのバカ力だよね！」

「……普通にヤバいね。」

「でしよでしよ。完成出来たらまさにオーパーツ。科学が魔法も個性も超えた瞬間になるわけ！　なんでも人生50回分の心臓を動かせるとか言ってる人もいたし、こいつで5000年分先に行ったと言っても過言だね！」

「それで、これを作るのにパラジウムが必要、ってわけだ。」

「そゆこと。一応パラジウム以外に必要なものあるけどうちの父様の個性のおかげで比較的簡単に手に入れそうなんだよね。私個人で買おうにも、そうなると親が間に入っちゃうから姉貴に頼んでるの。」

「ということはこれかなり危険なのか？」

「モチロン！ だって3億Jだよ！ 失敗して暴発したらこの辺り全部消し飛ぶよね！  
もちろん実験してる私もろとも！」

「……それニコニコ顔で話すことじゃないだろ……。親御さんに心配かけたくないからパラジウムの入手と制作はこつちで、んで起動するときは周りに危害加わらないような場所見繕ってくれ、ってことか？」

「そゆこと。」

「……………ハア、どうせ止めたら勝手に自分でし始めるんだろ。解ったよ、用意してやる。」

「さっすが姉貴！ 頼りになる〜！」

「だけど、危ないことになったら絶対手を引くんだぞ。」

「解ってるって！」

ま、実はシミュレーションで失敗しまくってるから若干にやあムキになつての実験なんですけどね。

「んでさ、前から言ってる音声データの件だけど……。」

「なんか恥ずかしいからヤダ。あと勝手にやったら出禁にする。」

「残念……。」

（『音声データが規定量を達成しました。収集した音声データを元に私の声の変更が可能です。』）

バレなきや罪じゃないんだよなあ……！

—————

「はい、はい。そうです。今度動力源の実験をするとかで……」

「いえ、そこらへんは私で用意しますのでお手を煩わせるわけには……、あ、大丈夫なんですネ。」



「はい、ちゃんと作りたい物を教えていただきましたのですぐにリスト化して送らせていただきます。……はい、思ってたよりも多かったので……、はい、録音してあるのでちゃんと確認してからお送りいたします。はい、ちゃんと消しますので……」

「はい、いつもありがとうございます。では……」

分けてある方の携帯をきる。姉山さんもいい仕事してるよねえ。最初はもっと早めに処理しようと思っていたけどイスズちゃんも思ったよりなついてるみたいだし、延長、かな？ まあ好きに動かせる駒は多い方がいいし、言うことちゃんと聞いてくれるばそれでいいか。

にしてもアークリアクター、熱プラズマ反応炉、ねえ？

一体どこでそんなもの思いついたんだか。相変わらず私のデータベースを覗き込んだ形跡もないし、まるつきり自分で思いついたってことなら私の遺伝子も捨てたものじゃないのかも。

ヒーローに飽きたからうまい具合にリタイアしようと思っただけで思ってたよりうまくいった。彼女はほとんど私のクローンみたいなものだけどころなにも私と変わってくるなんてビックリ。最初は単なるカバーの家族ごっこだったけど子供はかわいいし、その子供は私の思っていた以上に成長している。

最初の私の遺伝子から生まれた子はどうなるかの実験から私の思考パターンが母親の方に寄せられている、その経過観察みたいになってきている。

こんなすばらしいイレギュラーがあるから実験はやめられない。

……ああ、そろそろ“お父さん”のメンテナンスしておかないと。

家庭を保つってのは難しい、ねえ。

「母様、ちよつとよろしいでしょうか？」

「あ、イスズちゃんお帰りなさい！　どうかしたの？」

でもまあ、娘はかわいいし、この難しさもいいものと思う母親の私がいる。

科学者としては……

余興にしては、いい出来じゃない？

## マイ人工衛星ってカッコよくないですか

『現在、リストアップしたものがすべてになります。国家のデータベースを探ればもう少し出てきそうなものですが、リスクが大きくなりすぎると判断しやめました。』

「おkおk。……にしても8つ。両手で数えられるぐらいとはなあ。それもちゃんと動くかまだ分からないし。」

『稼働していなかった場合、修理か新品の打ち上げ。どちらにしても宇宙に飛び立つ必要がありますね。私としては現在のWiFi環境で稼働できる予想ですし、姿勢制御プログラム及びボデイの試作を行うべきかと提案いたしますが。』

「ま、正論なんですけどねえ……、自分の好きかってできるのは結構ロマンあるし便利なのよ。……一応動かせそうかハッキングしてみて。それで判断するよ。」

『かしこまりました。ハッキングを行います。』

あ、どうもお世話になってます。イスズです。……ちよつと待てなにお世話になってるんだ？

現在は偉大なる社長を参考にして自分の人工衛星を入手できるか試行錯誤中です。ねらい目は個性黎明期の混乱によつて存在がうやむやになった軍事衛星。これが自分のものであれば通信関係で問題が起ころことはなくなるだろうし単純にカツコイイ。あとできればヴィブラニウム探索の足掛かりにしたいつてのもある。

まあどつちみち宇宙に飛び出さないといけなくなりそうだし、そうなつてくると動力源であるリアクター完成させないといけないし、宇宙空間で耐えられるボディとちゃんど飛行して帰ってくれるように姿勢制御プログラムの雛型ぐらいは組んどいたほうがいいのは正論なんだけど……ねえ？

目の前に大きなエサつられてたらそつちのほう選んじやうよね、つて話。

んで、最近姉貴が何故か入荷していたスパコン関連のジャンク品を言い値で購入し、

母様が「こんなに大きい機械が必要ならお部屋足りないよね。あなた！ 事務所もあるんだからイスズちゃんに上げてください！」「ええ!？」という取引の結果私の研究室になった元父様の部屋にスパコンおいて現在ハッキング中である。

にしても現在使われていない衛星で電波発しているのが8つだけとか思ったより少ないのね。黎明期のことは資料でしか知らないけど文化が停滞しかけたとか描いてあるからもつとほうきさされてるとおもったんだけどなあ……、案外引き継ぎがうまく行ったのかねえ？

それと父様は後で励ましておいた。部屋を取ったお詫びで毎週土曜日、学校のない日に母様と一緒に父様のお弁当を作ると言ったら号泣して喜んでいた。イヤそこまで喜ばんでも……

そういえばかなり簡単にお部屋の掃除終わったみたいだけどなんでだろ？ 母様が事務所もって言ってたからそっちに私物とか多くあるのかな？ と言っても前お邪魔した時はそんな感じしなかつたし……。私の知らない部屋が事務所にあるのかも。

『ネットでの情報になりますが、愛娘の作ったものは天にも昇る素晴らしさ、まさに聖遺物というものがありません。お父上もそうなのではないですか？』

「そういうもんなんですかねえ？」

『私としてはマスターが料理を作るといった方が驚きました。てつきり部屋だけもらってそのままポイかと。』

「いや私どんな性悪に見られてるの??? そこまで研究狂いじゃないからね? ……それにもいつもお世話になってるからなにか恩返しがしたくて……。」

『……(はあ、めんどくせこのマスター。どうせ面と向かって言え。と言えば恥ずかしいから無理とかいうんだろうし、親はそれを微笑ましい顔で見てるし。)でしたらお母様にもなにかして差し上げれば? 私としては作ったお弁当の残りなどを食べたり、自分の物も作りどこかに出かけたりとかを提案いたしますが?』

「……うん。そうだね。そうしてみる。……あとなんかレス遅くなかった?」

『裏でハッキングしておりますので。それと、姉山様からメッセージが届いています。』

実験の用意が出来たとのこと。』

「いいねえ！」

次回はアークリアクター起動実験になりそう。ではまたお会いしましょう。



## 起動実験の日

オツス、オライスズ！ 今日も元気なJSだぞ！

なんと今回は特撮の撮影とかで使われそうな採石場になんて来てきている。もしこのSSがライダーものだったらいいものかとかいうんだろうなあ…。

んでまあ結構ごついの用意してくれたよね、姉貴。

「そりゃまあ町吹っ飛ばなんて言われれば、ねえ。こちとら娘さん預かってんだから無事に返さんといかんし……。」

おう、まともな大人。

「わたしのことなんだと？　はあ……、一応用意できるだけの鉄板と資材かき集めて知り合いに作ってもらった即席核シエルター、爆心地予定地に向いてる面はオールマイットの全力ストレートにも耐えられる、つてあいっら言っただけどまあどうだろね。まあやれるだけのことはやったよ。」

いや、ありがたいですなあ姉貴。んで、後は私がリアクターくみ上げた後にこのシエルターの中でスイッチオンぬ、つてわけですな。

「そゆこと。あ、あとこれ費用ね。ちゃんと払えよ。」

……8桁ちかくあるんですが？

「残当、ちゃんと払えよ。(まあ実際はもつと高くなるし、シエルターのスペックももつと上らしいけど。)」

これは姉貴もイスズも知らないことだが、実はこのリアクターの実験のために制作されたシエルター、この時点では未だ現役で全身無傷である魔王になりたい一般通過おじ

さんことAFOが見つけた場合「言い値で買おう」というほどの耐久性を誇っている。オールマイトの全力ストレートどころか全力ラッシュに耐えられるしろもの。なんでもなんもの作れるんですかねえ？

なお見た目はちよつとごつめのプレハブ小屋みたいになってます。カモフラージュも完ぺきですねえ！

「じゃあ取り合えず手順に従ってやることにしようか。最後の電圧かけるとこだけ遠隔ですとして。」

「はいはい、一応爆心地予定地のところで作れるように言われた機材置いといたからそつちでやっておくれ。ここから一キロぐらい離れたところにあるあそこね。」

「ぬう！ 爆心地とはひどいよ姉貴！ ……まあ失敗する可能性高いけど……。」

### 手順

1. パラジウムを溶かし、鋳型でリングにする
2. 永久磁石を付け、コイルを巻き、はんだ付けで溶接する（この永久磁石とコイル

はトロイダジバコイルの役をする)

3. 制御用A-Iと熱電変換材料(ゲルマニウム、シリコン、鉛、テルル、ビスマス)の入った容器に入れる

4. 水素ガスを入れ、その後電圧を掛ける

5. 完成! 熱プラズマ反応炉! 三億Jのオーバーテクノロジーだよ!

—————

「んで、一応手順終わらせてシエルトーの中にいるけど……」

今回私を用意した、というか実験する予定のリアクターは三種。まあ三種と言ってもサイズが違うってだけの物だけど。上から20cm、15cm、そしておそらく原作のリアクターと同じサイズに近い10cmの三つ。正直20cmですら成功する気がしない。まあそんな私の不安が解っているせいか……、

さつきからずっと姉貴が隅で丸まって震えている。しかもどこから引つ張り出した

のか完全防備で。

「イヤだって改めて考えれば町一つ吹き飛ばす爆弾の実験じゃん、大の大人だって怖いものは怖い……」

まあ姉貴の姿が一番正しいと思うし、その恐怖は当たり前なものなだけけど……

「狂気、っていうかもうすでに技術とかそういうのに魂売り渡しちやってるからねえ……、ま、仕方ないのかな。」

恐怖よりも興味。自分の手でこの世界に見合わない技術、異世界の技術を作り出せるかと思うと興奮しかない。

「イヴ、ちゃんと計測できるようになってる？」

『各計測機、すべて正常です。人工衛星からの観測も出来ています。いつでもどうぞ。』

そ、前回言っていた人工衛星の件。黎明期の混乱によって放棄されたと思われる衛星の中にまだちゃんと生き残っているものがあつたので無断で拝借している。まあ軍用の衛星で複数の用途のために作られたものつぽいけど、最新のものと同比べればスペックも低めだし経年劣化でいつ使えなくなってもおかしくない。そこらへんは早めに解決方法を考えないとね。

「じゃあ大きい方から順に、まずは20cmから。……………起動。」

『爆発は起こりませんでしたね、マスター。おめでとうございます、対象は正常に起動したようですよ。』

「……………ふう。ま、とりあえずはやっと彼の足元に追いついた、つてところかな。」

磯野、試験開始の合図をしろ!

「はい、ヨーイスタート。」

なんかプレゼントマイクがb i i m兄貴リスペクトでRTAでも始めそうな試験開始宣言をしたところで、どもども、イスズちゃんです。

話が大きく飛び過ぎて田舎のお侍様が明治の東京を見て「なんじゃこの面妖な町は! もしやこれがハイカラというもの!」みたいな感じで画面の向こうの読者の皆様は驚いているんじゃないですかね。

……画面の向こう? 読者? 何言ってるんだ私。

まあとにかく時間は流れてわたくし中学三年生。今現在試験中にて大空を飛び回っ



ております。あの後、というかりアクター完成させた後色々ありまして。

廃棄されたまだ生きてる人工衛星を私物化したり、姉貴の店をA Iのジャック君が儲けてくれた金で買い取ったり、リアクターの小型化に失敗して例の採石場が更地になったり、梅雨ちゃんの新しい家族の誕生を祝ったり、気づいたら中学に上がってヘビの友人が出来たり、マイアイアンスーツ第一号であるマーク1が完成したりと色々ございました！

うむ、マジで色々あったな。

ま、このこまごましたことは後々感想欄で頂いた意見とか見ながら読者様が見たいの書いたりしまして……、感想欄って何？

うん、まあどうでもいいか。とりあえず現在試験中に搭乗して稼働させているマーク1ちゃんについてご説明いたしましょう。

外見はまんまアイアンモンガーです！ M C U版であのハゲが乗ってたやつね。結局リアクターの小型化が最初にできた20cmの奴よりも小さくならなくて……、本家様と同じように胸にくつつけるタイプは諦めてランドセル型にしております。ま、背中

にリアクター担いでマース、つてことで。

武装としましてはマーカーちゃん高さ2.5 m弱、横幅1.5 mほどありますの結構ありまして……、肩に内蔵している5 mmのバルカン砲2門に、腕部に付けられた暴徒鎮圧用のスパイダーウェブ発射装置。あと危ないんで今日は乗っけて来てないけどミサイル用の発射口が50ほどついておりまする!

うゝん、単なる高校入試にしては過剰戦力。梅雨ちゃんにも「さすがにやり過ぎじゃないかしら?」つて言われたけど何故か試験監督とかに咎められなかったのでヨシ!

あ、ちなみにスパイダーウェブ発射装置は急に「スパイダーバースに呼ばれたときのこと考えてなかった!」と思って付けとききました。なんでその思想に至ったのかは私も知らん。レオパルドンに聞いてくれ。

『計測終了。全ターゲット及び生徒の位置情報を確認しました。簡易マップも作成しましたので表示します。』

あ、そういえば今試験中だったね、ありがとうイブ君!

『いえ、それよりもこのまま宙に浮いているだけなら不合格になるかと。ターゲットのロックオンは完了してありますのでバルカン砲でもぶちかますのはいかがでしょうか?』

うにや、最初はスパイダーウェブで動きとめるにやし。それでポイントもらえるし、バルカンはゴム弾だけど誤射が怖いのだ。

そうやってポンポンとロックオンされたターゲットに対してウェブを発射。何個あ避けられるけどまあ気にせず撃つちゃえ! あ、それとこのマーク1。手足にリパルサーついてるけど背面にもジェット噴出機構が付いてるので姿勢制御もラクチン。ずっとお空に浮いていられるよ!

『それと現在開発中のマーク2に比べて着脱が簡単というものもありますね。それと永遠ではなくリアクターの電力が続くまで、です。』

ま、そりやそうか。今んところ原作で社長が洞窟で作った奴よりも出力低いもんね。サイズこつちの方がデカイのに。

『それでも1億J。化け物発電電力ですが……、それでもマーク1は大食いですので30分ほどしか全力戦闘は無理ですけどね。』

試験中十分持つから問題なし!

カチャ! カチャ!

ありや、ウエブ弾切れ?

『そのようですね。両腕合わせて合計100弾。後半になるにつれてこちらの攻撃に気が付いたターゲットに避けられ、命中率が下がっていたので改良が必須かと思われる。また現在の攻撃で合計64P分のターゲットを無力化しました。試験前に設定していたノルマ、50Pを達成しております。』

ガチャン、という音と共に使い切ったウエブのカートリッジを排出。本来なら新しいのに自動で交換されるんだけど今日は持つてきてきてないのでなし。まあクモの糸の薬品はまだ大量にできてないから仕方ないよね。

「じゃあ後はレスキューPでも稼ぎに下に降りて探索してみましようかねえ。」

そう言いながら高度を下げようとすると……

『新たな熱源反応を感知。動力源の大きさから事前に発表されていたOPターゲットかと。』

轟音と共に崩れ落ちるビルの中から、現れた巨体。マイクがドツスンと表現した巨大ロボがそこにいた。

「Oh！ 思ったより大きいね！ それにこのイベントあるの忘れてた！」

『思い出されてから10年ほどありますし仕方ないかと。一応こちらで今後起こりうる出来事は記録しているので事件発生前にお知らせしますね。今回は私も忘れていました。というか優先度が低すぎてようやく引っ張り出してきたところです。』

「ま、研究三昧だったし私も忘れないように記録しておいただけだから致し方なし!」

『生徒の位置情報が対象から急速に離れています。その場で止まっているものも見受けられるのでパニックになっているかと。』

「うっしやあ! なら高度維持。胸部リパルサーに全エネルギー集中! イヴ、対象動力源ロックオン!」

『警告、このままでは攻撃後電力切れを引き起こし、そのまま落下する可能性があります。中止を提言いたします。』

「却下! リパルサーのテストかねてついでに落下テストもしよう! 全身金属鎧だしこの高さだったら死なん死なん! せいぜいビルの7階!」

「それにこんな巨大ヴィランに後先考えない全力攻撃とか!」

『「大好き！」でしょう？　かしこまりました。ロックオン完了。いつでも行けます。G  
OOD LUCK!』

全力砲撃

REPULSOR RAY

胸部リパルサーに青白い光が集まり、瞬間。発光。

その胸部から放たれた眩い光線はOPターゲットの動力源を貫き、沈黙。ゆつくりと  
その重心が崩れだす。

「よっしやああ！　みたかスターク！　あたしもまだまだ負けてねえ！」

『警告、リアクターの電力が枯渇しました。復旧までに3分ほどお待ちください。あ、あ  
と落下します。』

プスプスとなんだかヤバそうな音を高度維持のための背部エンジンが立てながらそのまま停止。

楽しい自由落下の時間である。

「うん、しまらないね！ んじゃ皆さんまた来週！」

数秒後、とても鈍い金属音があたりに響き渡った。

—————

「それでイスズちゃん？ テストの方はどうだったの？」

ヒーロー科の筆記試験が終わり、ただいま実技試験の説明会場。なんやかんやで幼小中と同じ学校だったイスズと梅雨は同じ学校で番号が振られているせいか、ここでの席が隣同士だった。



「ま、私にとつちや簡単でしたねえ。サポート科も同じく。変な自由筆記あつたから縮退炉、科学技術だけでの実現について述べてやった。」

「ケロ。また難しいのやつてるのね。」

「ま、私の存在証明みたいなものだしねえ……、あと早急に動力の改善しないとすぐ燃料切れになる。」

「そういえば今日はあの大きいスーツで受けるの？ 正直許可されるか怪しいと思うのだけれども。」

「いや、私もそう思って小物だけで行こうとしたら母様が『もつたいない！ ママに任せといて！』ってどつかに電話かけたらなんか通った。」

「……………たまにイスズちゃんよりもあかりおばさんの方が怖くなるわ。」

「いやなんでも後輩が雄英の教師してるって言ってたけどなんでこれ通ったんだろ？  
明らかに個性とかそれ以前の話だと思っただけどねえ？」

「試験に軍隊連れて来てもいい、ってことになるものね。ケロ。」

エヴィリバデイ セイ ヘイ!

「あら、始まったみたいね。」

「ホガ、ホノハハ？ ホンデホタシホホハラフェテルホ？（あの梅雨さん？ なんで私口  
抑えられてるの？）」

「だって全力でノツて騒ぎ始めるでしょ。説明終わるまで静かに。」

「ふあゝ。」

『はい、はい！ もちろんです！ 頂いた指示をこなしました！ ですの家族だけは……、えっ！ 用なし!?! ……まだ！ まだ私はお役に立てます！ 立てますから！』

先日、わざわざ文部科学省まで呼び出され、大臣から直接のお達し。『ヒーロー科試験の大幅な改正』。詳しくはサポートアイテムなどの持ち込みに関する規制緩和。

もともと対ロボット戦闘という対人向け個性の受験者に不利な試験は相澤君の好む合理性に欠けるとして高校側から見直しの要求はしていた。……していたが先ほどの会話。

急な変更を疑問に思い、処罰覚悟でわざわざ大臣の部屋に盗聴器を仕掛けたが当たりだったようだ。

規制緩和が受理され、ヒーロー科試験が終わった後にこの通話。そして……

『文部科学大臣！ 不正発覚！ 多額の教育費を横領していた疑い！』

今朝の朝刊。たとえばボクの個性が「ハイスペック」ではなくとも解るだろう。

思い出してしまうのは17年前。アメリカにいたオールマイトや当時新人だったヒーロー、ミスター・マシンやA・I・Mのおかげで何とか壊滅まで追い込めた超巨大ヴィラン組織。世界各地の政府を裏から操っていたヒドラー。

多くの犠牲を払って、奴らのすべての拠点を破壊し、リーダーの捕縛まで、できた。出来たはずなのにいまだ残る不安。これ以上の犠牲を払いたくなかった、そんな思いのせいか無視していた不安。

まだ、アイツらは生き残っていたのかもしれない。

「根津校長、どうかしましたか？」

「あ、イヤ！ 単なる考え事サ！ じゃあ相澤君、彼女のことヨロシクね！」

「……解りました。」

今回のヒーロー科試験、急な規制緩和で得をしたものは一人だけ。

重威イスズ。自作のヒーローコスチュームを使い主席合格した彼女。個性【思考強化】。

そして、ヒドラとの戦いで活躍した二人の娘。

優秀な成績を取めたから、ということではわざわざ用意した特待生の席。主席、という席を彼女に渡さないようにするためだけの椅子。例年通りなら40人の定員を41人に。生徒を溺愛してしまう節のあるブラドキング君、管君から合理的に判断でき、そして届け出以外の個性だったとしても対応できる相澤君に。

正直に言う。迷った。しかしながら情報が足りな過ぎた。

ボクたちが持っている情報はないに等しい。  
だから彼女の合格を認める必要があった。

二人の娘だから大丈夫。そう思ったのならどれほど幸福だったか。  
考えたくもないが、もしボクの考えが正しければ、

あの時払った犠牲は全部無駄になる。

初日の様子は次回他視点でやるなんて……

ちよつとやりたい展開が出来たのでそれまで結構加速気味で行きます。

それと投稿が止まってしまつて申し訳ありませんでした。今後もゆつくりと行きま  
すのでご容赦いただければ

—————

「し、しんどい、ちぬう……。」

「ケロ。前も言ったけどちゃんと体作らないと駄目よ、イスズちゃん。」

あ、どうも。イスズです。ちよつと久しぶりになっちゃいましたね。

今現在私は雄英一日目終了、私にとつて鬼門だった個性把握テストなるものを終わら  
せた後になります。一応試験のあと、10年ほど前の私が忘れないように書き残してい  
いた原作の流れを確認しました。それなんで登録上『思考強化』という個性を持つてい  
る、実質無個性の私がどうやってあの除籍大好きおじさんの魔の手から逃れようかと  
色々考えたんですが……

ま、思いつかなかったんですよね。正確には考えるのが面倒になってしまったというべきか。そんなどうでもいいこと考えるよりもマーク2、マーク3の開発、アークリアクターの発電力向上に時間をかけた方がいいと思っただけですよね。

マーク1ことモンガーちゃんを持っていったらそれで十分だろうと思っただけのこともあります。モンガーちゃんを装着して挑めばまあ大丈夫だろうと。いきなり『君、除籍ね?』と言われることもないだろうと思っただけです。

うん、お察しの通りうまくいきませんでした。まずモンガーちゃんの輸送問題。原作のトニーよろしく私もモンガーちゃんまで飛行しようとしたのですが、普通にヒーロー社会の法に引っかかる。輸送しようにも最終調整中のマーク2とは違い、モンガーちゃんは重量級。とっても重いです。運ぼうにもわざわざ姉貴に輸送用のトラック出してもらわないといけないわけで……。初日に持っていくのが無理でした。

「確かにモンガーちゃんは重そうだよ。でも運ぶためのトラックも色々改造してたん



でしょ?」

うん、その通りさ梅雨ちゃん。

マーク2は原作アイアンマンスーツのマーク3にあたる。まあ簡単に言ってしまうと、ば着脱するのに専用の機械群。ロボットアーム君たちが必要になってくる。現在その設備が存在しているのが私たちが下宿しているお家の地下だけ。わざわざ家帰って装着して、学校行って、取り外すために帰る。正直言って面倒なのでその装置をトラックの荷台のところに設置することで手間をなくそうとしていた。

一応なんかあったときのために、というかV S 脳無のためには防御力と基礎パワーが違うモンガーちゃんが出撃できるようにモンガー専用のスペースも用意はしてたんですけど……

「結局今日までに改造が間に合わなくて大変だった、というわけね。」

そういうわけである。しかも運が悪いことに『荷台今動かしたららめえ! 全部水泡に帰しちゃう!』って状態で止まっちゃってまして……、切り上げてモンガーちゃんだけ持って来るみたいなことはできませんでしたよ(泣き)。

一応、知ってるくせに用意せずに行くのはマズいなあ、って思っただけの使い捨てリパルサーを半ダースほど用意したけど私の元々身体能力が高くないで、というかクソ雑魚ナメクジなんで苦労しましたとも。ボール投げや50m走。立ち幅跳びに反復横跳び（これは使うべきじゃなかった）に使用できたのは良かったけど、姿勢制御のプログラムがないせいでいらぬところに吹っ飛ぶわ、手がクソ熱いわ、着地に失敗しそうになるで大変だった。極めつけは最後の長距離。そもそも私は研究職なのであって、そんな体力いらないだもん！ アーマーあれば十分なんだもん！

「それで、一番最後まで走ってて長距離は最下位。相澤先生すごい目で見てたわよ？」  
べく、だ。私に走らせるほうがおかしいの！ だってこれまでずっと研究三昧！ 運動なんてしたことないもん！

「だから昔から少しでも体力付けよう、ってランニング誘ってたのよ。」

……もしかしてちよつと怒ってる？

「ええ。……今日は肩貸してあげるけど明日から体力づくりのために一緒に走りましょうね。イスズちゃん？」

「は、はい。」

へびににらまれたカエルとはこういうものか、と個性：カエルの梅雨ちゃんにそんな感想を抱いたイスズであった。

—————

「ふいふい、やっとモンガー運び込めた。もうちよつと軽量化した方がよかつたかなあ？」

あ、どうも。イスズです。現在引越しの真っ最中でして、やっとこさモンガーこと

マーク1スーツを地下研究室に運び込めたところです。

『軽量化のために装甲を薄くすれば試験時の落下に耐えられませんでした。なので諦めてくださいいマスター。それとほとんど姉山様と梅雨様に任しているのですから少しくらい働いてください。』

「はいはい。」

試験から数週間後、やっと届いた小型プロジェクターから出てきたのはオールマイト……、ではなくネズミだった。

『ハハッ！ ネズミか犬かよく解らない人こと根津校長さ！ 雄英高校の校長をやらせてもらってるよ！ まあ早速試験結果を発表しよう！ 重威イスズちゃんは……、合格なのさ！ 筆記試験はほぼ満点の言うことなし！ 実技の方は、敵ポイントも65P、それ以外に審査していた救出活動ポイントなんてものもあつただけですけどちは20P！ 合計85Pの文句なし主席合格さ！』

『……それで提案があるんだけどイスズちゃんにはサポート科も受験してたよね！ 現在ヒーロー科ではまだ準備が整っていないせいでヒーロー科のカリキュラムをしながらサポート科のカリキュラムも教える、つてのはちよつと難しいんだ！ お国が運営するウチの悪いとこだよね！ まあそれで試験会場に持つてきていたサポートアイテムを見る限り、ウチで教鞭をとつているパワーローダー先生のような道を通りたいと判断したよ！』

『それで、特待生の提案というわけサ！ 主席、つていう称号はなくなっちゃうけどちゃんと両方できるようなコースを用意させてもらったのサ！ この後送られてくる書類に詳しく書いといたからご家族とよく相談して決めるといいサ！』

ま、まとめていうと校長のお力でヒーロー科の授業後に特別補講という体でサポートアイテム作成免許の取得を目指すコースを作つてくれたらしい。元々あつた他の制度をうまくごまかして使うらしくて、主席つていう肩書がなくなる代わりに全力でサポートするのサ！ ということらしい。

私としては別に主席に思い入れがあつたわけではないし、父様も『合格できればそれでいいんじゃない？ しかも両立できるようにサポートしてくれるんでしょ？』という

感じだったから賛成派だったが、母様は大激怒。『私たちのイスズちゃんが主席じゃないとか……！ あの新ズミとつちめてきます！』と現役時代のコスチューム持つてきたからもう大変。

父様が出撃しても止められなかったのでモンガーも出撃。家が半壊したがまあ、止められたからよしとする。

『半壊したおかげで下宿許可が下りたのでまあ良かったのでは？ 下宿先を自分で購入した物件に変えたせいで資金面に問題が発生しましたが。』

「週一で帰らないと母様が拗ねる、つてことを除けばね。お金は……うん。」

自宅から雄英は結構距離があり、通学に時間がかかるのだが『イスズちゃんと離れたくない！』と母様が駄々こねながら主張していた。それが自宅半壊のおかげで？ しぶしぶ下宿許可が下りたわけで。

『姉山様の名義で勝手に家を買って、勝手に地下まで掘り進めて改造し、研究所まで立てちゃいましたものね。まあご友人の梅雨様もちゃんと誘ったのはマスターにしては評

価できますが。』

姉貴の店はすでに株でもうけた金で買収済み。実質オーナーはイスズちゃんなのだ。それを利用して新規倉庫兼従業員住居という体で雄英近くの土地買って家建てて、地下掘って倉庫兼研究所を建てたわけである。おかげさまでスーツ作成に支障をきたすまで資金を使ってしまったが。

「ま、元から秘密基地欲しかったし、必要経費必要経費。研究に打ち込めるってことにし  
としい。」

「ふう。とりあえずおしまいかしら。」

「梅雨ちゃんく〜！ 大丈夫かい？ 必要なら手伝うよ、ダミー君が。」

「!:(^^)!」

荷解きに少し疲れてしまい休憩していると、イスズちゃんとロボットアームのダミー君が顔? を見せに来た。

「ケロ。手伝ってもらわなくて大丈夫。もうすぐ終わるところだったし。」

「(^^)——U——」

「ああ、お茶ね。ありがとう、頂くわ。」

にしてもお家から通おうと思ってたけど、イスズちゃんからルームシェアのお誘いを受けるなんてね。中学に上がってからできたお友達、万偶数ちゃんとは違って幼稚園からずっと一緒のお友達。人によったら腐れ縁みたいに言うのかしらね。

「……ああ、そういえばイスズちゃん。この前『入学式するときなんかあるから注意しとくんやで梅雨はん!』って言ってたけど結局何なの?」



「あゝ、いやゝ、それね？ うん。いや私の超賢い頭脳がはじき出した計算と言いますか……。」

明らかに動揺して口が回らなくなるイスズちゃん。昔から何か隠し事、彼女にとつてそこまで重要度が高くない秘密について尋ねた場合、大体こうなる。ちなみに重要度が上がるごとに彼女から感情が消えていくので怖いらしい。私はあたふたするイスズちゃんしか見たことないけど、この家のもう一人の住人かつ私たちの保護者にあたる姉山さんがそう言ってた。あまり信じられないけど……

「イスズちゃん？ 悪いことはしてない？」

「いやゝ、してないっす。するとしたら誰にも気づかれないようこそそと……。」

ふざけてダミー君と子芝居を始めたイスズちゃんの頬に舌で軽い一撃。『あひん！ ありがとうございます！』なんてさらにふざけるイスズちゃんを無視して部屋の整理に戻る。一生の内かなりの時間を共に過ごした仲、かなり遠慮がなくなってきた

気がするけど……。ま、私たちの仲だしね。それにどれだけ誘っても『と、トニーですら二作目からだし！ 私もそれぐらいで大丈夫だから（震え声）』と、体力作りのためのトレーニングをしないイスズちゃんのための手加減もしてる。

「ふふ、親父にもぶたれたことないのに！ この痛さは中学の時ふざけて新型リアクターの起動実験をおこない理科室を爆破しそうになった時以来！ ……ん？ どしたんジミー。」

「( ; ∇ ; ) /」

「え、親友の梅雨ちゃんに無視されて可哀そうだから頭撫でてあげる？ やかましいわ！ そんなに生意気なアームは大学の研究室に寄付しちゃいますからね！」

まあ、色々あったし。これからも色々あるでしょう。でもイスズちゃんがいる限り退屈なんて言葉を思い浮かべる日はないでしょうね。

「ケロケロ♪」